139
7
209

東京圖書館

和書門	兵法類	二九九函	五一架	二〇九號	七冊

裝劍奇賞

附録 根附師名譜并圖
緒ト玉石類

柒全

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻　139-209

ガラス使用

裝劍奇賞卷之七 附録

浪華 稲葉通龍 新右衛門著

根附工 并圖

印籠巾着等すべて佩垂の墜に用ふ根附と云。名物に帖に懸錘の字あり。近世これを刻して名をほしく少かるべし。今は工の巧拙にのらるべし。名稱を録し。間其象を圖して鑒賞に便す

法眼周山 大坂島内住 詳ニ下ニシルセリ

すべて彩色根附に世に贋物多しとなれども。能画の所為なれば。企及べからず。令嗣法眼に乞て左に圖す

国立国会図書館 装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

藤江四郎兵衛刻

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

藤江四郎兵衛刻

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

先考法眼周山先生、諱克興、號探僊叟、画名之盛、世之所固知、而先生初稱周次郎、好刻佩隆、其所摸象多就山海經及列仙傳圖中、取其物狀尤瑰奇者、而或補或省、或窄或匾、弄鐵縱横、唯其思之所擬、着色詭異、必出乎人意表、然中歲已後、止不復造、而垂以其罕、故欣賞彌衆、屬者、友人稲通龍、著裝劒奇賞、附録有佩隆譜、出象諸工所刻若干品、而就余請寫先人遺製、誼不可辭、但前所謂奇物怪象者、今已為人所珍襲、不可復多閲、則曷有以飽當夫世所欣賞乎、然余意乃以為、先生此技、本亦丹青之餘適、則今雖非為奇特者、且隨所有以存其形似、亦何傷於先生、遂寫所有一二、以貽焉云、

欽賜法眼周圭吉村充貞識

藤江四郎兵衛刻

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

龍神全図

山本傳兵衛刻

右　法眼周圭男　吉村周南充國寫

雲樹洞院幣丸　姓氏未詳　大坂蟹島住

此人世にいふ神道者にして、人の需あきバこき我雕刻を、甚だ上手なり。但刻せる所多くはらざる故、知る人亦多からず。今其一二我撰び左に図してこれ我廣む。もづて素刻にして、彩色の相なし。あきどもはづかに衣など褄我を見るほどの事にて、薄彩色なり

小笠原一齋　紀州人

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

近来無双の名人まして、現在の人なれども得易からざ、さべて象牙鯨牙等我用ひ雕刻する事。至て細密まして人工の及びがたき手際なり。下に六図を寫せ、象牙の色を付ざる素刻なり

飛龍

名闕

山本傳兵衛刻

圀象

天虞山神

元興寺假面

人魚

右雲樹洞刻図

橘保年寫

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

右一齋翁刻図

山本傳兵衛刻

三輪　姓歟名歟スベテ詳ナラズ下倣之ニ　江戸関口水道町

上ゆく子供の獅子遊蛸獵師など稱するあり。すべて樹木の素刻にして。紐通の穴に萠黄乃染角を入れ。象牙のあハなし

和流　江戸人

此人もし三輪の牙子にや。三輪の形に倣へる彫多し

蓑荷屋清七　大坂備後町西本願寺横ニ住ス

え欄間工にして。根付を兼作るに。甚だ巧に細密なる故この名り。すべて素刻なり。色付象

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

牙等なし

九郎兵衛　大阪長町住

彩色根付師なり周山刻我偽造(ギザウ)を志すれども甚だおとまり

根来(ネゴロ)宗休　大阪京町掘住

入歯工乃名人にして根付も又上手なり

龍木(タツキ)勘蔵　大阪天満住

此人の根付たまくゝ見せり

又右衛門　紀州住

上手なり故に今も高家にて よき根付我見

まで紀州の又右衛つでもあらふかといふほどの上手なるなし

雲浦可順(ウンポカジユン)　文字未詳今或人ノ云ヘル所ニヨレリ　大阪道頓掘樋ノ上ニ住ス　修驗者ナリ

彩色精(クハシ)しからず唐人をのゝのあやしげなれを彫刻(テウコク)を素刻(スボリ)象牙等なし

岷江(ミンカウ)　勢州津人

木刻に色々と興(キヨウ)をそくる巧(タクミ)を尋(ロウ)を たとへば達摩(ダルマ)我彫るに其眼(マナコ)のぶれくしと ひつくりこのへるなど甚だ拙(ツタ)なかしず故に其にもてもやせり現在の人なれども已に偽拙(ギブツ)あるまで其ぬ我知(シ)

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

れべし

春周（ハルチカ）　姓氏居住等未詳

友忠（トモタヾ）　京師人

和泉屋七右衛つと稱ず。牛を彫（ホル）事ぬに詣（イタ）せり。関東（クワントウ）にて特（コト）に賞玩（シヤウクワン）す。故（ユヱニ）偽造（ギザウ）の多き事。百を

もつてかぞふべし。其相ハ格（カクベツ）の手際（テギハ）なり

勘十郎　大坂久寶寺町谷町

顔（カホ）手足を象牙にて作。衣帯（エタイ）に黒檀（コクタン）を用て。人

物を彫し人なり

田原屋傳兵衛　大坂住

勘十郎弟子なり。象牙木彫ともに作る

我樂（ガラク）　大阪人

利助と稱ず。田原屋傳兵衛弟子。器用なる彫（ホリ）之

為隆（タメタカ）　尾州名護屋本町八丁目住

其多右衛つと稱ず。此人一流を彫（ホリ）出せり。人物

などの衣紋（エモン）に唐草を堆（ウヅダカ）く彫上し所。尤（モツトモ）奇

妙なり。故に其名をとゆ

河井頼武（カハヰヨリタケ）　京都人

佛師なり。其根附玉極奇麗（キレイ）に摸（モ）する所の

もの。必一曲（ヒトクセ）ありて興（キヨウ）を添（ソ）ふ。一家（カ）とつふべし。お

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

もなし。此人の作。年代追て賞を加べし

草花平四郎　博労町心斎橋筋

欄間師なり。此人草花を能彫を以て姓と
す。間根附も彫まり。しかれども多からず

法眼舟月　樋口氏　大坂島内ノ住　今住江戸ニ

画工なり。画を以て法眼位に叙す。此人細工
甚だ巧なるにより。根附を彫。もちろん手
際すぐれたり

奉真　京師人

象牙にて。蛤の内に宮殿など彫まり

佐武宗七　大坂内本町御秘筋ニ住

欄間師なれども根附にて。其名をこゆるハ果
して上手なれバし。彩色象牙木彫何にても。彫
刻せり

柳左　江戸人　御挽物師

挽物クワラ根附の上手。蒔繪印籠に墜しく
蒔絵にあたりても。きずつかず甚よし

廣葉軒吉長　京師人

十蔵　紀州和歌山湊戎ノ側

一齋の風に似たり。手際器用なり。日を逐て

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

上達せしなべし

柴田市郎兵衛　大阪堀江住

正直　京師人　象牙木彫スベテ上手最賞スベシ

岡友　同上

印齋　大坂北久太郎町難波橋

ふたゝや佛之衛と稱ぞ象牙狙公根附師し

是樂　江戸三十軒堀住

三小　大坂住

小衛といふ彫刻甚だ巧まして摸する所なぞ

すべてよきすれども恨くハ品ならんぞ

吉兵衛　住居未詳

辻　同上　上手木彫バカリニテ象牙ハナシ

畑友房　作州津山二階町住

塗師勘兵衛と稱ぞ ぬりもの根附作人

次郎兵衛　大坂住

角彫龍の墜鞘ハ作人

龜谷肥後　同上ニ　稱平助

本ハ機関工なり今入歯師まて根附も刻ゑり

和性院　文字未詳只云傳フルニ、カセテコヽニ字ヲ製ス　大坂上町ニ住ス修驗者ノヨシ

雲浦風乃彩色彫し

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

清兵衛　京師人

世に清兵衛彫（ボリ）と稱し名高く、此人の作ならざれども、木刻（キボリ）の志ほらしき我見をはなべて清兵衛彫といふハ、上手なるをばし、今僞物（ギブツ）多し

牙虫（ゲチウ）　居住未詳　此銘アルモノアリ

近江屋嘉兵衛　大坂島内住

玉治　京師人

大黒屋藤右衛門　同五條サヤ町住

友胤（トモタネ）　京師人　此銘アルモノアリ

霞鷲　居住未詳　文字音ニテカシユウトヨムニヤ此銘アリ

和十郎　大坂住　後江戸ニ居レリ

宇兵衛　大坂住

竹内彌須平（ヤスヘイ）　同上　彩色根附師

宜元（ヨシモト）　居住未詳　此銘アルモノアリ

光春（ミツハル）　京師人　同上

出目右満（デメウマン）　江戸人　御面師

なぐさミ彫と見てしまう、面（メン）の根附ハ自然（シゼン）乃ぬまて、他に及ぶものなし、又出目上満（ジヤウマン）といふあり、右満の子にや、是又上手なり、凡出目の銘ある物、面の根附ぬまて、外の形（カタチ）ある事なし

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

豊島屋伊兵衛　大坂住

スヒガラアケ（関東にて火ハタキといふ）を銀又銅の針金（ハリガ子）にて一樂（イチラク）のくみものごとく、くさらる根附に作人なり。又瓢覃もこれにしたり

唐物（カラモノ）久兵衛　泉州堺人　鑄物師

クワラ、スヒガラアケに就、唐金鑄物（イモノ）の根附あり

一樂（イチラク）　同上ニ　土屋氏號ニ望藤軒ト

籐（トウ）又ハ細き藤（フヂ）にてくみものゝ腰下に作り出せし人なり。又瓢覃などの根付をも、くさものにて作れり

中山大和女　江戸住

象牙のクワラ乃根附に獅子龍など或玉杯細（サイ）

蜜（ミツ）に針尖（ハリノサキ）にて、毛彫（ケボリ）たるものなり

附

人魚骨（ニンギヨコツ）、

奸商（カンシヤウ）、人魚の骨（ホネ）なりとて、人を欺（アザム）き利をむさぼふりのあり。甚だ非（ヒ）なり。是ハ鬼鱶（オニブカ）に腭（アギト）なるに、これに識者（シキシヤ）に正（タヾ）せり。往々（ワウ〳〵）よろこびて根附に用ひ人あれば、こゝにこれをことはれり

根付時計（ドケイ）　又香合（カウバコ）時計トモ云フ

紅夷（ヲランダ）人貢（コウ）するにより、すべてヲランダドケイといへど、其属國（レヨクコク）スセリヤといふ島（シマ）にて作（ツク）ると、此國

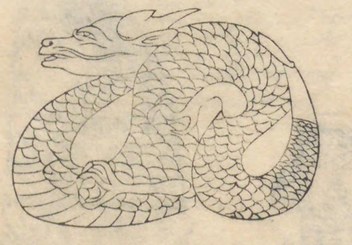
国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

此人天文にくはしき我いくこれ我製せり。又一種フランスといふ國にても製せ。何も妙工をて巧なりといへども。根付に用ゐる時ハ日久しかるずして工合必そこなふ。たゞたゞにおき。掌中に玩びて其奇工我愛すべし。

唐彫根附

唐山の人。此方の根付のごとく。佩ゑるにハあらず。印鈕（古来印鈕の図下に出す）刀柄。杖頭。冠帯の飾乃。佩墜り堪たれを。孔なきハ穿て紐をとほし。或ハ紐のむすばるべきハ纏ひて用ゐなれバ。其形の名稱

此詳ならざるものを多し。只其奇なる我りて。唐彫我このむ此むしとすべきなり。今奇なる物若干種を得て。皎天齋此翁に乞て。左に図せしむ。其奇物ことに其ことにあらず。得に随て十が一我集るのこと



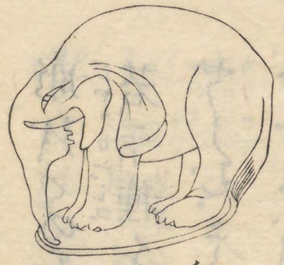
藤江喜平次刻

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

裏有印

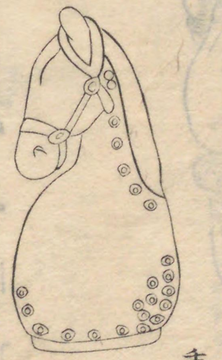
裏有印

藤江喜平次刻



裏有印

面

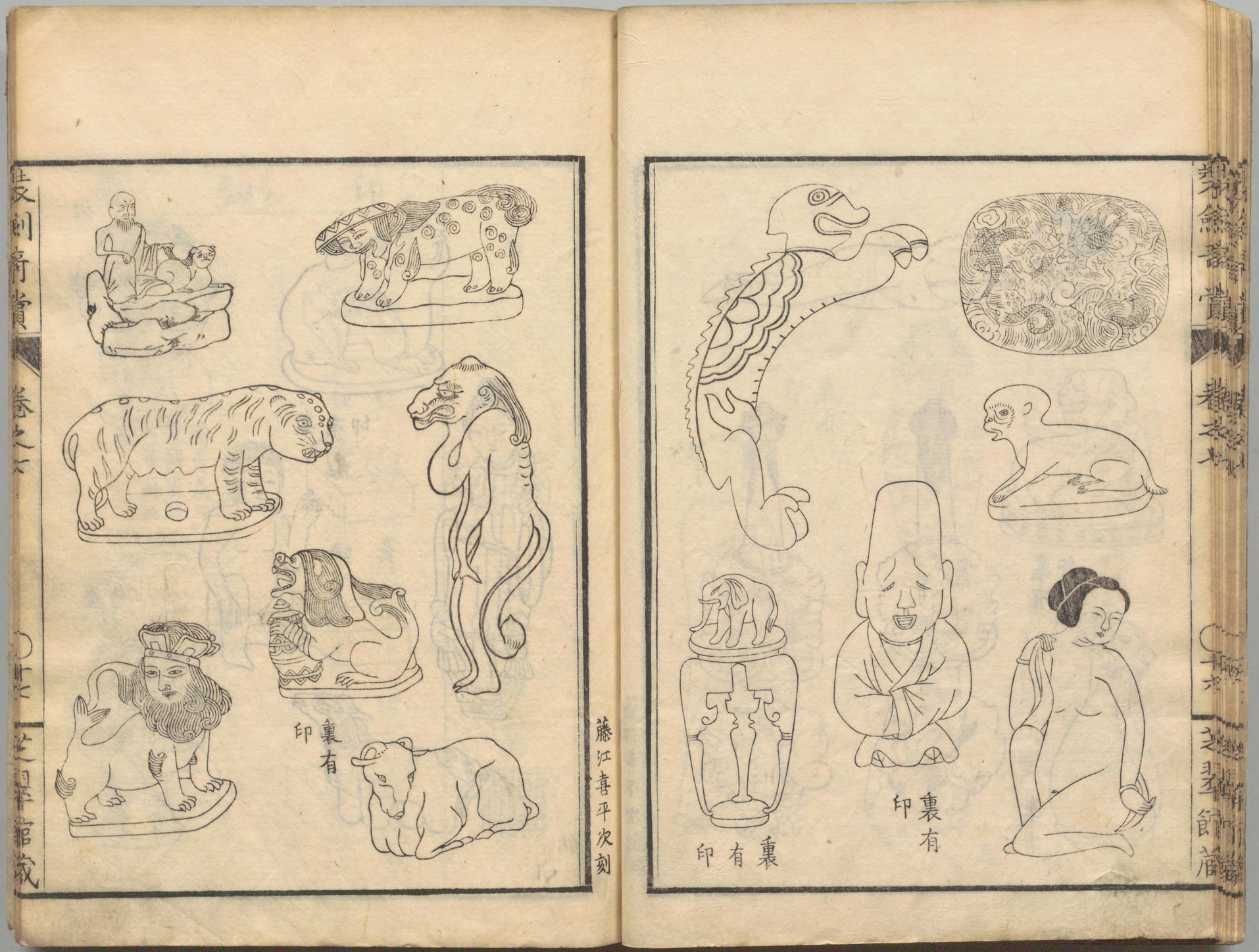


裏有印

背

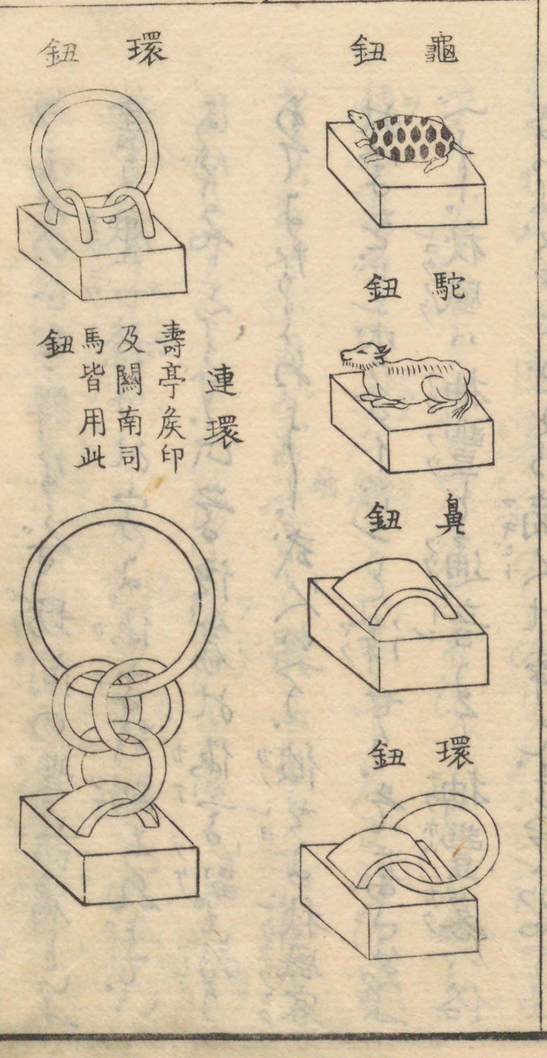
国立国会図書館　装劍奇賞 7巻　139-209

ガラス使用



国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

印（イン）鈕（チウノ）圖（ヅ）



右

橘國雄寫

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209

ガラス使用

緒ト玉類

ヲシメの正字詳ならず。坊間の学語篇といふ書に、壓口捺子の字に、假字を副あれども、いこゝらやしらず。此学語篇の假字副も得りあてまならぬよし。或人いへり。彼書に秋風客の字をビンボウダイジンと譯せり。そ甚だ笑ふべし。秋風ハ抽豊と通音にて抽豊客ハ俗にいふ。スアヒをとる高人の事也。さべてかやうなるハ推量にて假字を附たるものにて、これを信用するものハ、大に迷惑する事なり。只

我邦にて製したるものハ、文字も通用するやうに取合てしべし。是我邦の事実なるよしきゝおよべり。余固寡聞のものなれバ、此説によりて、さべて正字を考へ用ひず。をじめとハ、緒をしめるの用が體となりて、名に用ひたるなり。あふぐ用が、あふぎと體になりて、名に用ひたるがごとし。俗に緒メとしく。メハトの字なり。ト居などの訓を假たるし。此緒メの玉石類、江州木内小繁が作の雲根志に出たるハ、さべて正しき説なれバ、彼書に譲り

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

てこゝにをもらせり。此書ハ商家乃為に傳ふ事
ハ。尋く産物家に質問せず
俗に珊瑚珠といふ。雲根志に出たり。故に此
に略す。交易家にハ亞媽港を最上とす。就中
粉吹玉と稱するもの。至て稀なり。薄桃色に
して。珠の内より。粉を吹出すがごとし。又唐
人口と稱するものあり。色赤く至て下品なり。
血玉と稱するも此類なり　此外に黄色乃ものあり。黄珊瑚珠と稱す同種也
琥珀　雲根志にくはし。古渡を上とす。新渡ハお
とれり。産所等通商考に出たり

瑠璃珠　真物至て稀なるよしいへども。余已に五
六顆も取あつかへり。其物ハ日又ハ燒に照しみる
に。珠の中。濃紫に紺がちなる色からやきて。活動
するがごとし。おるんにハ無景なる黒石のごとき物
也。吹物ハおるんハ碧色に光あまでもすこしみれ
ハ。尋常の硝子乃ごとし。前漢書注に。大秦出
赤白黒黄青緑縹紺十種流離此自然之物と
あまでも。今みる所すべて。縹紺色なり。縹紺を
ルリイロといふハ。此珠の色によりていふなるべし
硨磲　通商考に。瓊州石といふ廣東の内なりとみて

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

なり。字書に石の玉に次ものとあり。又本草に其形如扇、背文如瓦屋とある様に見れば、海扇の類にて、石にあらず。此物玉て稀なるにや。いまだ出物ありあつかはざれば、貝か石か様詳にせず。今賣物に出るは、海扇様摩て作りたるもの。

水晶　雲根志にくはし。日向に産する様最上とす。

砂金石　一に金星石ともいふ。雲根志に出るとは別之。

商家にてこれを金水晶といふ。茶褐色にして梨子地のごとく光彩あり。但梨子地と違ひ、自然の光瑩甚だ鮮明なり。本草に毒を解し、神を結め、骨硬様治する功を擧。三才図会には、美人の首に装ふよし様しるせり。手器に作り、硯に供するといふも、皆貴人の清賞にして、庸人の玩にあらず。此玉の事、狂いふべきあれど事繁ければ略せり。手美なる事は、おもくは是をしるべし。

星珊瑚珠　青玉に赤光星のごとく、散瑩を、商家に此名様りて交易す。價玉て貴し。是をもれなら琅玕の属にて山より生ず希品なり

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

雲南石（ウンナンセキ）　又花文石（クワブンセキ）ともいふ　五彩の小石にあつめて摩（スリ）たるものごとし。いづれの産にもやしらざ。雲南石といへば即（スナハチ）其地より出るものもあらんか

瑪瑙（メナウ）　雲根志に出たり。但高家にこれ我は瀝石（ツガルイシ）といふ。は軽より出るもや。は軽より出る舎利石（シヤリセキ）といふ。は軽より出るもや。は軽より出る舎利石（シヤリセキ）とハおし

猩々石（シヤウジセキ）　舶来の物なり。瑪瑙の光（ヒカリ）なきごとく。また赤き事赭（ニツチ）のごとし。是又交易の名にして。正名（ホンミヤウ）いまだ詳ならず

キンパク　是琥珀の至て瑩徹（エイテツ）するものにて。其色の

淡（ウス）き事。よき玳瑁（タイマイ）を摩（トギ）出（イダ）したるがごとし。小さき蟲（ムシ）など。玉の中に吸（スヒ）こゝて。鮮（アザヤカ）に見ゆる事。琥珀のおよぶ所にあらず　但色濃（コキ）もあり。とかく鮮明（アザヤカ）にすきとほるものを金珀と稱せり

ロハク　黄茶色（キチヤイロ）にして光なし。琥珀の一種（シユ）なり。其色の唐蝋（タウラフ）に似たる故に。蝋珀（ロフハク）と呼（ヨ）ぶなるべし

南京石（ナンキンセキ）　又唐瑪瑙と云　猩々石に光彩（クワウサイ）あるものなり

カラフト　一名ムシノス　吹物ナリ　奥州松前（アウシウマツマヘ）カラフトといふ所より産す。色浅黄乃濃（コキ）がごとく。自然（ジネン）に理（スヂ）。又蟲（ムシ）の喰（ハミ）たるごとき巣（ス）あり。又巣（ス）なきもあり。上品之。偽物（ギブツ）ハ茶碗藥（チヤワングスリ）なりて焼（ヤキ）たるものなり

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

夜光（ヤクワウ）　貝をきりて製（セイ）したるものの様なり

真珠（シンジユ）　本草に石決明（セツケツメイ）に産ませとあるハ、茶用に供（キヨウ）するにして、小粒（コツブ）なり。結トに用ゐれハ、大さ豆（マメ）のごとくありて、何れ貝より産せるなり。又石決明より出るも、大なるものあるなり。さぐて詳ならず

七寶（シツハウ）　舶来のものハ玉て下品なり。但古渡（シ）にハ甚だ又事なるあれど、今得がたし。只江府平田氏乃製、古渡にゆづらば、雲龍牡丹獅子等の作、殊に妙といふべし

雞冠石（ケイクワンセキ）　雄黄（ヲワウ）乃中の色よき様結トに作せり

蠟石（ラウ）　篆印（テンイン）に用ゐれ石なり。古渡のようしき様玉とかし。唐草（カラクサ）などの揉（モヤウ）を彫（ホ）アて、結トとせ

銀沙石（ギンシヤセキ）　砂金石のごとくにして、色浅（ウスネズミ）鼠に銀彩ヲ入ルものなり

平戸（ヒラド）　きたじめ肥前（ヒゼン）の平戸にて製するにより、て名とせ、今京師より出たして、玉と下品に賤價（センカ）れものなり。ふるきものハ、金（キン）又銀の針重（ハリガネ）様、巧（タクミ）に組（クミ）て、あるに玉（タマ）類を装（ヨソ）ひて結メとせ

羅漢（ラカン）　唐胡桃（タウクルミ）に羅漢の像様彫（ホリ）たるによりて名とせ、蠻人の製にて、巧（タクミ）なるものも、珠数（ジユズ）のごとく貫（ツナ）ぎて

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

波る。羅漢のかくちをせ〳〵ある

曲王（ニヘガタ）　神代のおなごそう〳〵雲根志よりて

そう。天皇寺（テンワウジ）和尚（ホンケウジ）のはなしに。上古冠服

和州なるのほとり城掘（ホ）るとて。間（ハ）ゝ銭得ると。上古冠服

ありのまゝ城掘（ホ）るとて。間（ハ）ゝ銭得ると。上古冠服

此飾（カザリ）なり。今法（ホウ）ト云（イフ）ものゝ用ふべきかなるかゝ〳〵

青瑪瑙（アヲメナウ）　星珊瑚珠（セイサンゴジュ）のごくにて光彩（クワーサイ）なり

但古来青珊瑚珠と称（ヨ）ぶ。星点（ホシテン）ありて。星青音（セイセイコエ）同じ

そ。本府長堀（ナガホリ）橋北詰。龍野屋宗兵衛（タツノヤソヘヱ）と云（イフ）人改（アラタ）

星珊瑚珠と称（ヨ）ぶ。宗兵衛年久しき。佩物屋（ハキモノヤ）なれば。これ我朋人（ワガホウジン）

求（モト）めおかれもとごふ。商（アキナ）ふ人（ヒト）通（トヲ）ざれば。これ我朋人（ワガホウジン）

求（モト）めおかれもとごふ。商（アキナ）ふ人（ヒト）通（トヲ）ざれば。これ我朋人（ワガホウジン）

金物（カナモノ）緒（ヲ）ト類　金銀烏金（シヤクドウ）四ツ一等（ヒトシナ）にて。高彫（タカボリ）の色絵（イロエ）、

毛彫（ケボリ）象眼（ザウガン）或（アルヒハ）イモツギ等あり。間（ハ）ゝ宗珉（ソウミン）宗興（ソウコウ）の銘（メイ）

ありのもそ〳〵

石英（セキエイ）　雲根志（ウンコンシ）より出（イヅ）る。黄白黒紫の四色あり。俗（ヨ）に琢（タク）

磨（マ）して緒（ヲ）ト（シメ）に用（モチ）ふべし。黄色のものは江（エ）

出（イヅ）と

白珊瑚珠（ハクサンゴジュ）　船来（センライ）のもの〳〵。其（ソ）おももき珊瑚（サンゴ）すく

白（シロ）ゝ海底（カイテイ）よりそるものとそ。雲根志（ウンコンシ）に名未詳（メイミセウ）

崑崙石（コンロンセキ）　其色（ソノイロ）の黒（クロ）き玉（タマ）なりて。ふもを弥（ツケ）なるべし

琉球珊瑚珠（リウキウサンゴジュ）　又（マタ）狼三五（オホカミサンゴ）珠（ジュ）ともいふ。薩摩（サツマ）石（セキ）ともいふ

巣（ス）のごとくなるものゝ。鉛丹（タン）の色のごとくすく〳〵。

珊瑚（トコロ〳〵）のめき木理（モクメ）あり

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

筋王（スヂバダー）　正名（ヤイメイバンヤウ）蜜名等未詳。紅夷人（ヲランヂダ）の吹（フキ）りのなり。古渡（ワタリ）

極品（ごくしな）のりの（ノリ）ハ光澤（クワウタク）なく。土（ツチ）ばつくろひるがごとく。

偽物（ギブツ）ハ硝子（ビイドロ）のあく。光（ヒカリ）つや（ツヤ）なし。

砥（ト）なして光（ひか）りそうなれども。消（ケ）なく瞞（ごま）かされず。孔口（スヂグチ）ハ光（ひか）

狂（クル）ハ殘（ノコ）りて。真物（レンブツ）の光（ひか）りなきものゝごとく。大（ダイ）に異（コト）なり。近（チカ）

年贋造（ガンザウ）多（おほ）く。こんにち（ニセモノ）古物の極（ごく）ハ稀（マレ）し。下（シタ）に圖（ヅ）そ

ガンギ王　えぶやう（エブリ）よりなり。

スヂ王

ガンギ王

トンボ王　是（これ）も吹（フキ）あし。但（タヾシ）地（ぢ）ハ虫（ムシ）の巣（ス）のごとき茶（クスリ）なり

トンボ王

同

同

て。色ハ浅黄（アサギ）をうすくさし白黄（しろき）芽（め）あり。紋（モン）ハ猫（ねこ）の文（アヤ）。

みちのくざくらのごとき花（はな）びらにて

印花王（サラサダー）　吹（フキ）ものく。筋（すぢ）ハ玉（たま）のごとき彩色（さいしき）まだらのあし。下（シタ）並（ナラビ）なし。

撰（エ）ばず。是（これ）も舶来（はくらい）のあし。

絲屑王（イトクヅダー）　吹（フキ）りのく。色ハ萠黄（もえぎ）う藍（アヰ）ねず。白絲（シロイト）ばく（ばかり）

線許（スヂバカリ）ありひるがごとく。但（タヾシ）糸（いと）の上（うへ）ゟ隠起（インキ）をかく（ごとく）。

招櫛石（ザクロセキ）　雲根志（うんこんし）ゟ出（いで）そう。但（タヾシ）徒（ト）ゟ用（もち）ゐ吹（フキ）ハなし。

金躰石櫛実（ザクロノミ）のごとく。地（ぢ）ハ一面（いちめん）ゟ氷文（クワウニフ）あり。古渡（ワタリ）ハ

石のごとく。新渡（しんわたり）ハいろ〳〵吹物（フキもの）とゝのゆ。

孔雀石（クジヤクセキ）　雲根志（うんこんし）ゟ出（いで）そう。よろく略（りやく）そ

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

緑青石（ロクセウセキ）　又雲根志ヨ委シ。吹物ヨアリ。次

紫水晶（ムラサキスヰセウ）　色うすくして紫ヨ製ス。墨流（スミナガレ）の大キナ

大理石（タイリセキ）　石質堅シ。雲南ヨリ出ル。白ク班（マダラ）ヨ

赤キ色（トビイリ）入アリて。ソノ方ヨ製ス。墨流の大キナ

ふがごとし。硯屏（ケンビヤウ）ナドヨ作ル。多ク渡ル

蛇石（ジヤセキ）　蠻名スラニカステンといふ。墨ノ暮（ゴイレ）ノごキ色

なり。ソノ瘡腫（サウシユ）の膿汁（ウミ）を吸（スフ）の功（コウ）アリと。実ヨ

もつほべし。是ヲ水中ヨ投（ヨウ）ぜれバやがて沫（アワ）を吹ク

事もそうなり。最（モツトモ）奇ト

凝水石（ギヨウスヰセキ）　越（コシ）の白山（シラヤマ）・又立山（タテヤマ）の

蛇の頭ヨあるゐ

なりといふ

ソノ流（リウ）ほごそ〳〵つまる

ゞやがて凝（コリ）て石とかるハ。極（ゴクカン）寒の地なれバ。土器（カハラケ）

色ヲして光（ヒカリ）なし。これを試（コヽロム）るヨ。水中ヨ投（ヨウ）れ

バ。水と混（コン）じてうごめくごとし。そ（ソ）の水（モト）なれバなり

薫陸（クンロク）　薬用の中より。堅質（ケンシツ）の物ヲ択（エラ）び製ス

雀石（スヾメイシ）　正名未詳。雀の羽（ハネ）のごとき色ヲして。白黒

の点（テン）あり。船来のものヲして稀（マレ）なり

厚貝（アツガヒ）　貝ヲ磨（スリ）ものヲして。ソノ実真珠（シンジユ）のごとく。紅毛（コウモウ）

ようのもの

南京染附玉（ナンキンソメツケダマ）　やきものうして。山水唐草やうの染附（ソメツケ）

あり。伊万里（イマリ）陶（ヤキ）のり（ギ）の紋ヲやきそ

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

鳳天　俗説に鳳凰の頭の骨といふ。さる祥瑞の物を屠べくもあらず。是ハから國の鶴の頭骨なはよし。色ハ唐蠟のめくして理あり。玉に製したる両方の腹。朱のごとく又事なり

葡萄石　雲根志にも此名あれど。彼ハ累々として是ふさ我なせるよし。圖にも出たり。緒トに用ひハ一顆にして蒲桃のごとし

玻瓈　白玉に杢目あり。日にてらしてみれバ。是杢の間。透徹して光あり。是七寶の玻瓈にや。又是抱に似たる故此名我付しにもあらん。玻瓈ハ水

晶の類にて。氷千年我經く化する和といへり

眼石　色ハさまぐあり。もりて緒トに作るに。自然に蛇眼のやきりの出たる。商家に是我眼石といふ。石の性ハ何にもせよ。右の理ありれバ名く

象牙緒ト　象牙我團く製して。或ハ細密なる彫をの我なり。多くハ根附に作れり

堆紅　唐又ハ長崎京都江戸にても製す

青石　星珊瑚珠乃赤点なきがごとく。石性軟らにして。蒲桃石とハ異にて。雲州の産なり

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

孔雀骨　孔口ハ木のごとくにして、全躰孔雀乃羽のごとき分き同もあれ、其色も亦能似たり。海中に生ずる所のものとあれども、商家に孔雀骨と字せり

鳳凰石　全躰茶褐色にして青黒白紅黄及びヒハチヤ色などの筋ありいやが上に彩たるがごとくして光あり。舶来のものにて稀なるあ。價も又貴し。自然石にして正名未詳

インス　蠻人の耳垂珠に穿し環に用ひしものなり。金にて造るあるいふなるべし。此方より

製せ匕輪の總トといふものあるにより、好事乃ものは猿をもて絵トに用ひしより、新奇ありて售んとこころがくる商家の倣ひ製せしより、間はものに行はれしなるべし。インスの名も不勢の訛りに、一應市人乃物に名くる時はたぐひ

牙玉　玉て大なる鯨ありて、ツコクジラといふ。其牙ありて緒トに作りて、生燕脂にて染偽珊瑚珠を作りたるありいふ。一説に海豚魚の牙なりともいふ

斑玉　瑪瑙の斑文あるものにて、自然に團なるものなり。本教寺説に奥州合浦より出ると。

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

已下二品ハ産所並に本義寺説なり

鬼餡餅　外白く内嵐色にして白絵に圓なり

信州の産

ツヨシ石　内白瑪瑙のごとく外に皮あり内光り

外澤なし肥前の産

香玉　藥種を細末して煉合せて玉となし花

など絵彫たるものに茶氣きこゆる絵ゆえ

にほひ玉といへり文ぎしも沈麝の薫ぎれ

にハあらず舶来のものに

菩提樹　天竺抱に菩提樹の事諸書に出たり

唐ツブ　ツブハ木患子の事にて即菩提樹の子に

和産のものも少し異風なる絵ゆえ用ゆ

人あり唐ツブといふものハ別物と見えたり淺嵐

色にして小児の雀の玉子といふものごとくして

和のツブよりハ大なり是何の樹の実なるにや

いまだ詳ならず

桃核　猿子又猿など絵刻て絵ゆとして根附師の

作なり此外猿多くあるべし其繁からん絵厭

ひたくこれに及ばさず

装劍奇賞巻之七終

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

伯兄通龍所撰裝劍奇賞成余受而卒
業以其事詳悉其文雅馴乃喟然歎曰
人之在世也以著名為榮而著名固非
容易之事以文著於治世以武聞於亂
世者固無論若不能則曲藝之特其亦
可冀也余家本系自河野氏蓋鎌倉氏
之時河野通信以武著爾後家門日衰
今已為庶伯兄自少放情肆志不治生

業及壯為賈以資刀劍飾具及襍貨為
業為之東往西去終歲不寧未幾頗致
家産乃分貲於牀通尹季通氏及余通
邦等各就其業初伯兄業此專亦用心
於鑒識蓋質諸先達復以自試日夜勤
攻以冀其精是以凡其所貨雖微小物
必辨眞贋賈販不苟且謂世之以鑒識
所稱者有其識雖頗精或祕而不傳或

国立国会図書館　装劍奇賞 7巻　139-209
ガラス使用

不精而為精以自高者故世賈人雖間
有志於鑒識者以其不傳不能得講究
真贋湯然唯利之求以誤人者往々不
少伯兄有慨于此欲著書以傳已十年
所其間業餘所録因世故未成篇深以
為憾客歳奮志就緒謝販粥及家事刪
正補綴繕寫完功即促梓氏乃未一歳
茲告刻成顧余宗五百年前有通信後

世胄衰降今已為庶蔑然寒微存猶同
亡然幸因伯兄之有此舉稍得揭姓稱
者豈可不以謂儕以文著於治世之類
乎雖是曲藝之一端庶幾足以益人乎
余也賤賈素不閑文事雖然方是刻成
心竊有喜心之不可自抑言之不可以
已乃託諸某氏文以述其所喜敢題篇
末云

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

天明改元辛丑秋九月初吉

仲弟稲葉通邦林蔵拜識

稲葉通邦
林蔵氏

芝翠館蔵板記

裝劍奇賞餘稿　嗣出

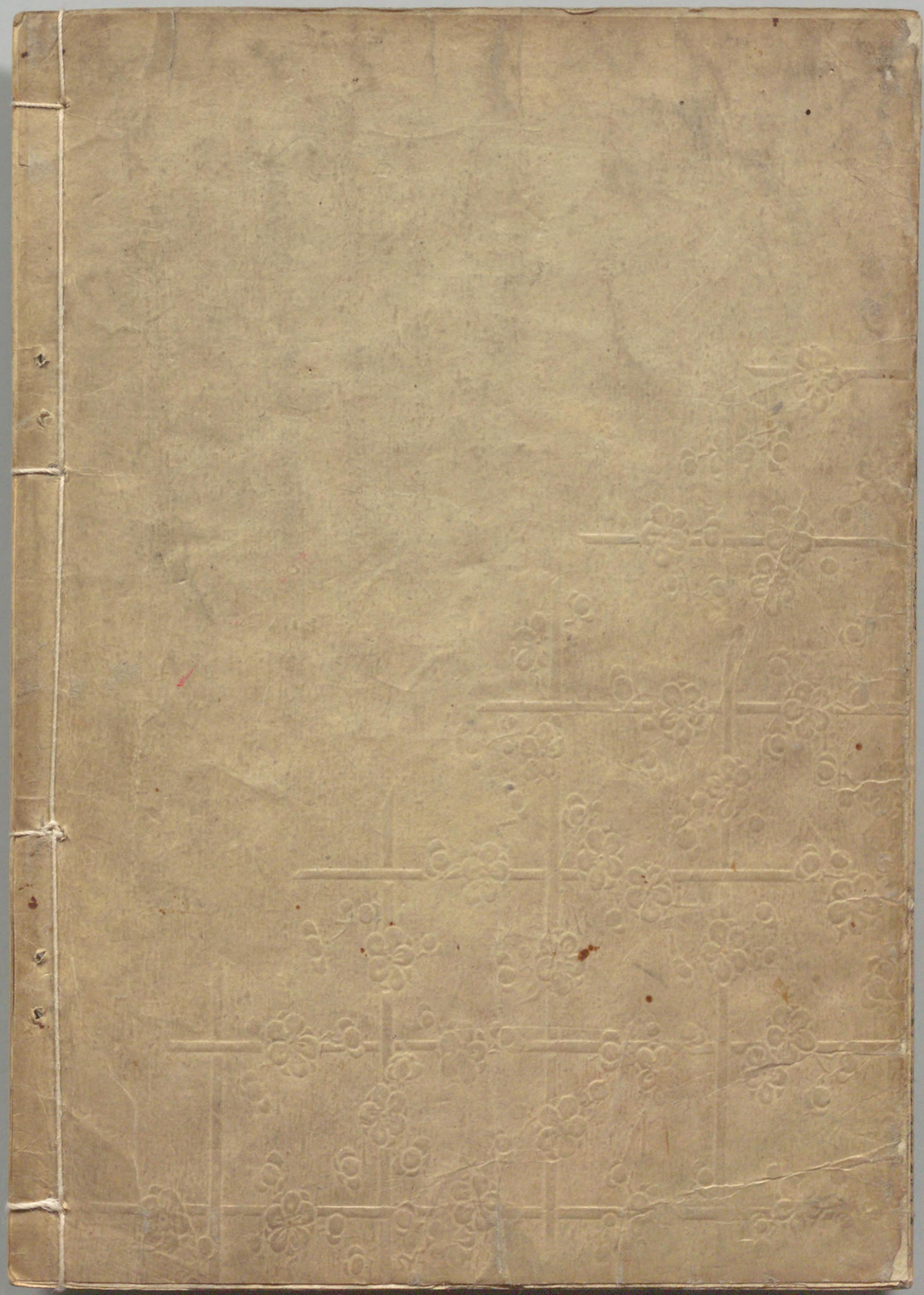
作者　大坂鹽町筋心齋橋西へ入
稲葉新右衛門

天明元年辛丑九月發行

国立国会図書館　装劍奇賞 7巻 139-209
ガラス使用

東都書肆　日本橋南壹丁目　須原茂兵衛
平安書肆　寺町通鏏師前　山本平左衛門
浪華書肆　心斎橋筋順慶町　渋川清右衛門
同　北詰町　上田卯兵衛
同　南久太郎町　柳原喜兵衛
同　南へ貳丁目　石原茂兵衛
同　安堂寺町　大野木市兵衛

国立国会図書館　装剣奇賞 7巻 139-209
ガラス使用



国立国会図書館　　装剣奇賞 7巻　139-209

ガラス使用